

松平 愚候の一夜城なんか、まさかありませぬ。
重門 はい、「御座」にこんな話があります。
ある時、信長が部下たちに「槍は長いのと短いのとどちらが有利か」と問うと、槍奉行の上臈水は「短いほうが有利です」と答えたのに対し、秀吉は「長いほうが

有利です」と答えた。信長は要請主義者だから、それぞれに五右衛門足軽を与え、四日後に懸下合をするとのこと。
上臈水はまず先に槍の突地訓練に入つたのに対し、秀吉は足軽たちを家に連れて行って、焼附バチを聞いたんですよ。当時の秀吉は謀略が得意で接待費も使えないから、高橋玄成はふるまえないけれども、白濁で彼らをもてなしていた。
そうして、「みな、聞いてくれ。今度試合をするのは、信長様が新しい戦のやり方を考へていらっしゃるから」と、なぜこの試合をやるかという意図を説明したんですよ。最近信長様は鉄砲という武器を仕入れ、その使い方を研究しているから、次の弾を入れるまでに時間がかかる。それをどうするかを俺は今度の槍の試合で実験したい。
では、どうするかということ、まず五十人は十七、十七、十六人の三列に分かれ、一列ワンパの三列、最前列は槍で向こうの脛をなぎ倒し、最後尾へ移動。二

信長という人は非常に人事管理に厳しくして、自分の政治理念というものを、部下たちに「頼む、年魚市を風を吹かせなくとも分かる部下グループ、説明すれば納得するBグループ、自ら言ってみて分かるCグループ」に分けていた。で、Cは一番遅くに配属しました。その最たる者は茶坊主の家です。
松平 現代社会と同じですね笑。
重門 そう、まったく同じです。
結局、信長が最後まで両陣を思っていたのは明智光秀と羽秀吉なんですね。光秀は浪人生活長いから各国の情報に通じていて、「あいつに聞けばよく分かる」と思われていた。一方の秀吉は信長のやりたいことを形にしていたわけですよ。
松平 愚候の一夜城なんか、まさかありませぬ。
重門 はい、「御座」にこんな話があります。
ある時、信長が部下たちに「槍は長いのと短いのとどちらが有利か」と問うと、槍奉行の上臈水は「短いほうが有利です」と答えたのに対し、秀吉は「長いほうが

有利です」と答えた。信長は要請主義者だから、それぞれに五右衛門足軽を与え、四日後に懸下合をするとのこと。
上臈水はまず先に槍の突地訓練に入つたのに対し、秀吉は足軽たちを家に連れて行って、焼附バチを聞いたんですよ。当時の秀吉は謀略が得意で接待費も使えないから、高橋玄成はふるまえないけれども、白濁で彼らをもてなしていた。
そうして、「みな、聞いてくれ。今度試合をするのは、信長様が新しい戦のやり方を考へていらっしゃるから」と、なぜこの試合をやるかという意図を説明したんですよ。最近信長様は鉄砲という武器を仕入れ、その使い方を研究しているから、次の弾を入れるまでに時間がかかる。それをどうするかを俺は今度の槍の試合で実験したい。
では、どうするかということ、まず五十人は十七、十七、十六人の三列に分かれ、一列ワンパの三列、最前列は槍で向こうの脛をなぎ倒し、最後尾へ移動。二



自らの拠点のユートピア化を目指した信長

既得権益をぶ壊した信長

重門 いつもNHKのほうでお世話になってます。
松平 いや、こちらこそ、重門さんとはいつも話しているのに、全然話題が尽きません。
重門 それは切り開いてきた人物というテーマですが、重門さんが「歴史を切り開いた」といって、まず思い浮かぶ人物は誰ですか。
重門 一番多面性があつておもしろいのは、やはり織田信長ですよね。でも、それまでの武士の価値観は「一所懸命」という点に後微されるように土地至上主義でした。それを壊したのが信長です。
まず彼があつたのが兵農分離

まそらく信長は織田信玄と比喩信の「川中島の合戦」を見て疑問に思つたわけですよ。なぜ必ず同じ場所、しかも五回も六回も繰り返されるのか、彼らはいかにやうと返すの1丁の達人だから、合戦日の日付や構成員の裏を取つています。そうしたら武田軍も上杉軍も、兵士も農民で、合戦が行われていた時期が農作業が一段落した六、七月だったわけですよ。
松平 農繁期はなかったと。
重門 一人の田が農業と合戦という二つの機能を働かされ、かつ農閑期だけの準備労働者からなら戦いに専心できませんよ。だから両方ともプロバニーに成つてほしいと、農民は農村に、兵士は城下町に社區をつくつてやるから、集まって住めと交こうという兵農分離をやつてのけたのがまず一つ。
そうしてプロバニーになった兵士者の生活の面を見るため、商工業者を誘致して、まずは岐阜で米市楽座をやりました。これは商工業者の負担軽減というより、徹底的に規制緩和をやつて既得権益を排除したわけですよ。

列目が前に出て、ひっくり返つている相手の頭を叩き、それで三列目が前に出たらどめを刺す」と松平 結果が良かったわけですか。
重門 秀吉側が勝利だったわけですが、後に信長がこれに応用したのが武田軍との長巻の合戦、足軽部隊の三段崩れなんですよ。この時、鉄砲の後ろに中間管理職を配置し、最後尾に信長と参謀が控えた。これは典型的組織そのものでしょう。
他の軍隊は中間管理職が一番前に、合戦のオウニングゲームでと名乗り出て十五ヶ所を削ぎ、明ていていましたが、そこを鉄砲隊がダダーンと撃つ。撃つたら後ろに回頭して弾をきまわす。こうすると、鉄砲を連発できわけです。
松平 なるほど、いまのお話を聞かして思い出したのが、先日読んだ新聞記事です。ラグビーの監督が「私は十五人バスターのメンバを遊ぶのではない。バスターの戦を遊ぶ十五人を遊ぶ」と言っていました。信長と秀吉はまさにそういう戦い方に変えたわけですね。
重門 信長と秀吉はそれまでの個

それまではまずとパテント制、例えは斎藤道三が油売りのため濃の国に來ると、まず石清水八幡宮に行つて高い許料を払うわけですよ。それこそ公認神主、工芸家なら御所の松尾忠信、それから物流ルートを滑らかにしようと、通行 船所を全部ぶつ壊して、関所税制をやめてしまったのです。
松平 ああ、その時代には信長 知識の最たるものですね。
重門 その発想の原点は尾張にあつた。年魚市思想だと僕は見えています。
「御座」というのはもともと「年魚市」と書いて、海から吹いてくる幸福の風が、ちょうど四つ辻である尾張に上陸して吹きつけるという伝説に由来しているのですが、おそろしく煩きようであつていた若き日の信長は、その地を目指して流れてきた旅人を接触していたと思ふんです。「どこから来たか、どこへ行くか」と聞きたがら彼らのニーズの一部を掴みながら、早

平和に暮らしたい。そのニーズを、年魚市風の柱にしていずれば、その風を日本中に吹かせたい」という思いがあつたのでしょ。松平 信長は平和志向だったと。
重門 一種のユートピア思想ですね。その表れが、彼が拠点とした場所につけた地名です。岐阜と、その名は、周の武士が非常にいい政治を布いた地名の岐山、それに付くもので、「山」を左の「山」の意味に「山」に置き換えた。安土もまた「平安楽土」の略だとか、この前3チャンネル「教育テレビ」で先生方が議論していましたよ。松平 そういう意味でしたか。
重門 要するに、自分が拠点とする場所をユートピア化して、それを全国へ展開しようとした。それが信長の政治理念であり、知識の原点だと思ひます。
一所懸命という土地への価値観を覆す
重門 長くなつて恐縮ですが、もう少し付け加えてもいいですか。
松平 信長は合戦に初めて組織戦を用いた人でもあるんですね。

大敵から組織戦へ、合戦の方法を先立に変えて、現代社会の組織の原型のようなものをつくりましたともいえます。
松平 そうして信長は数々の戦を勝利していきましたが、それに伴つて成功を立てた兵士みんなに土地をあげるものが難くつた。そこで冒険 重門さんがおっしゃる通り、信長は土地至上主義を打ち破つていくんです。
重門 そうです。そこで彼が持ち込んだのは文化です。
例えば先の戦で柴田勝家が活躍したから、能登の土地をやるから、このころが勝家は、土地よりも千利休から仕上げた茶碗をくさささい」といふ。そういう文化的なものも所有することで、私が田舎者だから文化性が足りないと、いう悪評を克服できるんだと、あるは秀吉にはお茶を聞く権限を与えながら、文化への造詣が深いことが一種のステータスになつたわけですよ。
そうすると、武士たちの給与制度が変わりますよ。併せて国民全体がタンス貯金を出しても文化的な衣や住を求めるようになつた。それが安土文化であり、秀吉に受